WASON
HQ
1104
J74+

Sept. 15
1888
no. 127

The Woman's Magazine.

女學雜誌

版權所有　一册五錢
各土曜日出版　當府内無郵税

明治廿一年　第百貳拾七號　九月十五日發

社説　理想の紳士(第三)
論説　クリスチアン、ホーム(内村鑑三)○妻君の資格(紅雨亭一枝)
批評　女學記者、日本を愛せざる乎○女學○穂積博士、婦人の勇氣○榊學士、婦人科患者の調査報告○日本婦女の地位
叢話　マーテン、ルーテル及び婦人の價値○戀愛の徳○夏休み後、女學校に歸りたる女生徒(上)○一唱百歎
小説　哲女の辯○さすがに双紙○小説神髄
佳傳　米國獨立革命の婦人
寄書
新報
外報

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 127. SEPTEMBER 15TH, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Beau (No III), Pseudo Gentlemen.

LEADING ARTICLES:— Christian-Home: (No III), by Mr. K. Uchimura. True Character of Wife. (No III), by Koutei.

CRITICAL NOTES:— "Does not the Editor Love Japan?" [Again about the new word "Jogaku."] "Professor Hodsumi's Woman's Courage." "Statistics of Woman's Diseases." "Position of Japanese Women."

MISCELLANIES:—What Martyn Luther said about Women. Girls Returning to School after the Holiday.

NOVELS:— "Tetsujo no Maki." "Sasugani." "Bouquet of Novels."

BIOGRAPHIES:— Women of American Revolutionary Age.

GNERAL NEWS.

通信女學の廣告

通信女學 第拾三卷 發兌

明十六日出版すべし

定價廿錢全國兼郵税 一冊枚數七十頁

誠に最良の教科書

内婦人の會讀の會に適せり又月

●昔時の女子（其四）

簑笠庵主人

○夫婦の中の親しみも禮あるうちは珍らかにして其情至て深く又厚し禮を失ふときは其情自然と薄くして離別も亦遠きにあらず仁義遜讓は禮を厚ふするの媒ちにして此禮媚諂と背を合はす智は痴とさしむかい誠は嘘と隣るさあれば心安だてと愛想づかしはいつも同居とみるべきなり。（雲萍雜志）

○今の世いやしき者の人にほこるにお乳母日傘にて育ちたる者ぞといふ諺あり昔は乳母を召使ふほどのしかるべき者の兒よは日傘をさしかけさせたる故にさはいふめり其傘は丹青もてさまぐの繪をかきし也殊に菱川か繪におほく見えて延寳天和貞享の比ろもつぱら用ひたりこれ近き世までもありしが今はたえて諺にのみ殘けり。（骨董集）

○和蘭にて産婆を謂て「フルウド、フロウー」といふ「ラテン」語にては「オブストチリキス」といふ此方及び支那にいふ穩婆とは甚異なりその「フルラド、フロウー」といふ女は少き時より終身不犯にして種々の戒行を保ちて尼の如くある者なりといふ蓋し生を重んじ姦を防ぐの意なるべし。（西洋雜記）

○女は柔和温順なるをよしとすべしされはとて武士の妻たるもの難に臨んで節を失ひ淺ましく命を惜しむとはあるまじき事にこそ。（京雜の記）

女學雜誌 第百廿七號 明治二十一年九月十五日發兌

社說

○理想の紳士

(第三)、似而非紳士　ゆかり記

今時の出來紳士は、即はち當今の時勢が造り出したるものよて候はん、之には妾等女性が關係する所ろは甚はだ少くて、何も左樣に責を負ふべき程の謂われはあるまじくとて窃かに鼻動めかして安心いたし居候。然るに此の出來紳士と略ぼ相似だるものにて、世に色男、もしくは女好きのする男と申すがあり。之は世上一般の通用には、ちと天保文久と伍を同うして、左程に評判の宜しくなき方々にてはあれども、何故か一流の女方には大層の有封に適なひ、其の仲間に於てヤンヤと賞め立てらるゝの需要に因つて、玆に一種風變わりの紳士出來致すとこそ承たまわり侍る。

之には妾等女性が關係するところ實に淺からず、必竟或る女方の好みによつて、斯る不評判の紳士も出來候とありては、妾等が掛り合ひ、中々逃れがたき因緣と斷念らめ、つら〱其の所云る風變わりの紳士を見率まつれば」。色白々と細眉毛、元と是れ肺病勞瘵を難み玉ふの故か、御姿た文弱にして人影うすし、又た神經質には人に後れぬお覺悟の候うとや、些細の事にも心配して直にくよ〱と歎き玉ふ、御樣姿は甚はだ温和しくして、ズット沈着の氣わり、錢金には些さかも頓着遊ばされずして、女には特更ら優しく持成し玉ふ、之れは先づ高等お人柄の殿方にして、深窓に養はるゝ揚家の娘、もしくは世の甘酸を甞め盡し放蕩男子の鼻毛を數み盡したる彼のソレシヤ流の女原に愛せらるゝ所ろのものに侍り。之に次ぎては、羽織を長く短かく着流し、黑の帽子を額ひ前深に冠ぶり、夏冬扇子を持つて、チホン〱と咳拂ひし、何時でも歌が咏ます、何時でも發句が出ますと言ひ相なる男子は、世間見ずの乙女、若しくは世間を知らぬ行過ぎの女性に愛せられ。話し上手にして人を外さず、着物は流行に合つて五分も透さず、特に帶と履物と時計と指環は意匠の凝つたるを示し、金錢の切れ離れ好くして、チゴルとを惜しまず、粹に行届いて意氣に行渡るは、三都京地の浮たる女性もしくは殊に氣の付くと云はるゝ聞かぬ氣の婦人方が、尤も愛顧する所のものにて侍らん。扨て又た、洋服、帽、靴、悉く西洋人めき、英語は中々達者にて、英語會もしくは英語演劇には人に後れず、特に舞

踏に堪能の聞え高く、唱歌音樂も一と通りは心得たり、之と話しすれば何んとなく面白く、第一シャレがお上手なれども差したる惡シャレはなく、兎角氣が置けずして萬事圓滑なりと申すは、所云る當今交際上手の紳士もしくは高等書生の方々にして、即はち是れ、上みは鹿鳴館出入の貴婦人より、下は洋語女學校の女生徒に至る概して西洋ずき開化ずきの婦人方が、尤も愛せらるゝ所ろの殿方にて候うべし。

斯樣に、色々のお好みはあれども、先づ大抵の女が主として慕ひ參らする殿方と云へば（但し〳〵此の中に妾は決して籠り侍らず、抑も妾わが慕ひ申す御方と云へば、后に委わしく聞こえ申さんとこそ存じ候）、第一に顏の好きお人あり、第二に深切なお人なり、第三に温和しくて沈着いて辭ばが少くて眞實に且つ高等なるお人なり。以上三つの性質は、凡そ女が慕うと申す慕はしき御方には、是非とも備わり居るべきものと存ぜられ候。實の所ろ、妾の如き偏窟ものにても、若し何如なる人を以て紳士とする乎と問われ候う日には、固より多少考うる所ろはあり乍ら、其の考の中には矢張り此の三つの性質を含ませ居るとを、自分乍ら白狀いたし侍る。たゞし〳〵妾わなどは、此の三つのもの丈けにて立派なる紳士が出來るとは存じ申さゞるなれ、世の多くの女方の中にハ、專ぱら斯る三性質斗りを以て、其の愛慕の鵠と成され候ものあるは、殘念此上なきこと、空怨めしく存じ侍る。

むかし〳〵、切られ與三郎と云へるは色男にて候ひしよし、お富とも云はるゝ粹の女が、何故かゝる不男を好み候かと、さぞかし御不審もあるとならんが、之は與三郎の切られたるを愛したるものにて、初めより切られたる與三郎を愛したるにてハ之れ無く、矢張第一の規則通り、顏の好き男を慕ひたるものと承わり候。成程、御面相の好きは、箱の樣な百性の樣な而もアバタに富ませらるゝ樣な男風よりは、見たる所ろにて心持ちが善きに相違はなしと信じ侍れど、そも〳〵好顏令色は仁鮮なしとも申し、顏の立派なるが必らずしも立派なる男子とは申されず候。西洋にてソクラットと云へば、古來二千三百年間學者仲間に尊敬せられたる人なれ共、其鼻は平らにして天に仰ぎ、其眼は突出して低き鼻を窺き、唇は大きく且厚くしてドテラの袖に似たりと言ひ傳へ、又た彼の著名なる詩人ポウプとか申すは、身の丈け低くして曲がり、顏色特の外見惡かりしが、余は姿た曲り面貌醜なれども、詩は直くして美なるべしと言ひたりと物の本に見へ候。其他、ナポレ

チンにしても、チルツンにしても、頼朝にしても、牛若にしても、皆な何んとかと申してそれ〴〵の落度ありしように、歴史にまで殘り居り候。古より英雄豪傑、君子大人と云つて、而して其の姿たの優しく、其顏ばせの花の如くありしと聞えたるは眞とに尠なきものゆへ、顏の好きを以て紳士とするは、先づ大間違の基ひと相成るべく、存ぜられ候。

次に深切と申す事、之は實に女の迷わしものにて、之れほど婦人の目に付き易きものは他に類なきことに侍る。先づ辭ば優しく、交はり眞實にして、少しも浮たる受答へなく、人が難義すると聞いては直樣眉の邊に皺を寄せ、病氣と聞いては直にお醫者の名前を指名し、何か頼まるゝときは實着に承知し、少々の事は自腹を切つて恰かも知らぬ風を爲し、一つの事を毎度尋ねて「先づ宜しかつた」と嬉し相に祝はひ、斯して些細の取成しにまで深切と云へる心意氣を示せば、大抵の女性は直と心醉し、妾が百年の身を托するは、天下恐らく此の郎の外にはあるまじと迄で思ひ凝むものにて侍る。成程、深切と云ふは結構の氣質にして、凡そ生きとし生ける人間には、何卒此の心得ありたきものに候へども、殿方の深切と云ふは、實の所ろ浮と信用敬服しがたきものに侍べり、又た女性が其の深切を感ずるの深きは、元來餘まり有がたき由所より出づるにては候はずと存じ侍る。抑も、女は隨分世の中にて非道目に會ひ、何處に行いても滅相に酷く取扱れて、實に可憐相なる捨小舟に候、何處にか他頼岸邊の近うあれかし、何處にか纏ひ付く大木の近うあれかしとは、何の女にも存する女々しき心持にて候ほどに、扨ては人の深切といへるものほどに深く心を打つ大慈悲は之れ無く候とよ。此は是れ苦しき時に神を頼み、貧乏したるときに救濟を喜ぶと同情にて、元と獨立心の無き、委賴心の多き、所云る女らしき性骨なるによつて慕はるゝの性質と申し候へば、女性が男の深切を有がたがるは、實は面白からぬ因縁と存じ候。特に深切なる男、即いち女の目より見て深切なりと申す男は、多くは意氣地の無い、氣の小さい、大きな事の出來ぬ、くよ〳〵然ぐち〴〵焉たる厭やな男子にて候。左なきときは、ホンノ一時女性の愛を買はんと欲し、甘まく深切の面を冠つて女の心を迷はす輩らなり、決して信用の出來ぬものと存じ候。何れにしても、男の深切は冬の花の如し、餘まり信用も出來ず、餘まり敬服もすべきものにて之れ無しと思はれ候まゝ、此の氣質あるを以て紳士とするは、又々大間違の基ひかと存ぜられ候。

これと均しく、男の温和しき、沈着ついたる、辭ば少なき、眞實なる、風采の高等なる等は、まだ〳〵決して賞むべきもの、上乘にては候はずと思はれ侍る。成程、剛毅剛强の大氣象を深く藏めて、而して温和しやかなるは、慕ふべきものに候。又た沈勇果斷自若として大山の崩るゝを何にとも思はぬ膽力ありて、而して沈着ついたるは、慕ふべきものに候。又た朴訥にして仁に近く、或は三年鳴かず鳴けば必らず人を驚かすとの覺悟ありて、而して辭ばの少なきは、慕ふべきものに候。又た、道德堅固、正を踏んで懼るゝなく、義に勇んで死を顧みず、理想高尙、志ざし潔白正大にして、而して其の言行の眞實なる、其の風采の高等なるは、慕ふべきものに候。然るに斯樣なる本尊は無く、何も深く守る所ろは無くして、而して只尋常に温和しく、尋常に沈着で、何の謂われもなく辭ば少なく、馬鹿正直に心狹く且つ眞實なる、而して無暗に殿サン風を氣取つて樣姿の高等に見ゆる如きは、紳士の氣質としては何の價ひもなきものと考へ候。此樣なる男に限つて、屹度意氣地がなく、人に逆らわぬ代りには人と爭つて正義を衝き通すと云ふ勇氣もなく、不性に沈着いたる代りには活潑爽快に奔走して國家の大立物となる氣象もなく、沈默寡言と云へば何か奥床しいようなれども演說も出來ず討論會にも無言の石佛同樣實に詰らず、眞實とは申せども存廢分け目の大任を托せらるゝほどの技倆はなくホンノ時間を違へぬ小さい事の約束には違はぬと云ふ丈けの眞實少しも話しに成らず、何れ程高等の風采ありとも昔しと違つて看板丈けにては役に立たずト云つて英雄の身替わりに立つて死ぬる程の英氣もない實に〳〵食いつぶしのお飾り殿樣たるに過ぎざるものかと存じ候。如何に考へが無いとて、斯樣なる男子原を紳士とするは、殘念此上なき事に侍る。

嗚呼〳〵、日本の女性諸君、即はち妾等の姊妹たる世上多くの婦人方よ。今時の出來紳士は今の時勢が造つたりと申して、少しは責を免れ候へ、右に申す一風變つたる美男子先生方は、吾々女性の愛顧によつて紳士と成り畢らせ、或は色男、もしくはレデーマンとか別稱して、此の明治の御時世に橫行いたし候ては、吾々女性の恥辱至極の事に侍らずや。何卒之れよりお互ひに一致結合し、以后は決して〳〵斯る色男を片目にでも眺め申さず、サラリと東海の絕端に退去せしめて、扨て眞正の男子、眞正の紳士を此の大和の大御國に出現せしめ參らするよう、女軍すぐつて盡力いたさうずるにては候はぬか、かし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くし謹んで御相談なし參らせそろ。

ダルヰン周遊記の末に書して云く、旅行する者には單獨の實事は面白からず之を比較するの習慣より直ちに概括を好むの風に移る此に於てか眞の樂ありと。思に書物の旅を行くものも亦然り、歴史の旅行を爲すもの亦然り、多く事實を知るもの何の効かあらん當今博識強記に誇るもの須らく其事實を概括して眞正の大理を味わうの樂に入るべし。

論説

○クリスチャン、ホーム(其三)

(米國理學士) 内村鑑三述　佃與次郎筆記

扨てそれあらばアナタ方は會堂に往て洗禮を受け聖書を説て居らるゝ其人にホームが出きるかと御尋になりましようが、私は今迄婦人にして會堂の働きに於ては誠に感心の樣に見へても其人の家は實に惡魔の家かと思ふ程のものを見ました、それ故に基督の精神がホームを作ると云ふには此精神は如何であろと考て見なければならぬ、私が考て見ますに一家のうち兒の二三人もありて是れを教育し朝は一番に早く起き夜は晩く寢ね家の掃除や洗濯に從事して居る此事は我にとつては此宇宙間に在て最も高尚にして最も有益なる事業であるとを承知するとであり升、何ぜなればホームと申しまするものは此世界に國民と云ふものありて政府を作ると同じとに、基督信者の手に教育と云ふ者を作らなければならぬ如く、ホトムは是非此世の中に無くてならぬもので御座います、それ故に國の大統領とあり帝王と爲て國を支配する人がある如く聖書を世の中に弘むる爲にペテロ、ポーロの如き人のある如くホームを支配してホームに由て小兒を教育し夫を慰め家を守りて行くべき細君たる者が此世界に無てならぬもので御座ります、一寸と淺く考へて見ますれば誠につまらないとです、一方の人は數千人の衆を集めて或は禁酒の効を説き男女の同權を唱へ或は女子も投票權を有する所以を論じ或は神の救の道を講じて居るに、一方は四方の壁の外には世界も無く竈と流しの前に於て一生涯を詰らなく送る他の人と比較すれば誠に小さいと云ふ考は淺墓な人に出易き考へで有ります、併しながら斯く考る人は人間と云ふものは必ずしも人を集め公けに立たないでも宇宙を動かすとが出來ると云ふとの分らぬものであります。

議論は止めとしまして、私は少し實例を擧げてお話し致しましよう、私は或年基督信徒の所に宿り居りし時に寡婦にて三十五六歳になる頗る教育もあり才智もありて身躰の壯健なる婦人があつて其人は日本を思ふと己れの國の如く思ふて居つ

た、それ故私は一週間ばかり其人の家に厄介になつて居ましたが、終に私は問ふて見ましたアナタは御獨身にして貧しくなく身躰は壯健であり教育もあれば何故アナタの思ふ所の日本にお出でにならないかと、其の人の答へに私は一人で傳道するよりも今に二人の傳道師を捧げる積りであると申しました、其仔細は前の夫の子供が二人ある婦人自身に往て傳道に盡力するよりも後に至りて二人の子をして盡さしむる考へであるのです。又今紐育に居らるゝ有名のシオドル、カイラーと云へる人は全く其母の手によりて成つたものと思ひます、凡そ六十年ばかり前其人の母は夫に別れタツタ一人の子供があつた未だ其子も幼く自分も若い又教育もあり活潑の性質であつたから或人は再婚を侑めて內國の傳道に從事さるゝ樣にと云ふたが、併しながら其母自ら決心した私は此子供一人の爲めに生涯を捨てる積りである、此子供を育てるは實に私一代の仕事だと云ふて遂に死ぬまで其目的を盡した、其目的を達する爲には小兒が學校に往けば其近所ゑ家を移し其學校が移轉すれば己れの家をも移すと云ふ樣にして始終其教育に氣を附けました、又中學に入り大學に入り專門科に入りて遂に說教師となりて出る迄は其子の事を思ひつゞけて一昨年に死なれましたが、其子の日々の仕事を爲すにも皆母から享け母から授かりしとであるから其婦人の死に至りて一層の哀を感じました。夫故に私はホームを作るには一に女王たる所の婦人の見識と料見にあると思ひます、若し婦人の考に於て我が爲す仕事は小さい小供を教育するなどは詰らん公衆の前で演說もしなければならん十分に運動もしなければならんと云ふなれば夫は迚もホームを作りて一家一致の樂みを爲すとは出來ません、併しながら若し婦人が此ホームを守る事が出來るなれば私は夫れこそ眞に神から命ぜられた所の仕事と思ひます。或人が申しました言葉ゑ今日義の爲めゑ死するものなどは無いとばかり思ふて居たら紐育には毎年幾萬の人が義の爲めに死んで居る、其は誰かと云はゞ職工人の妻君にして朝から晩まで狹き家に住ひ三四人乃至五人の小供を育て居る是れが紐育十九世紀の基督の爲めに死する所の萬々人の婦人だと申しました。

斯く申しますれば或兄弟は申します日本婦人は既に引込み思案をして居るものである、教會に出ると云ふ樣な公けの場所に進むを厭ふて居るものだから若し今君が申す如くすれば、日本の婦人は皆引込んで仕舞い一人も公けの仕事をするもの

が無なるであらうと、私は皆様に向て然う云ふ感じを與へましたなれば、私は大變に諸君に過まらなければならぬ。然しながら私は其兄弟に答て申します、若し茲に一人の婦人がありまして敎會の爲め或は公衆の爲めに仕事をすることが出きるなれば九人の婦人方は多分家の情實に追はれて公けの仕事は出來ぬことゝ思ひます、若し一人に對する九人のものがありて其一人は公けの爲に力を盡して誠に國の爲にはなるが我々九人は何も出來ぬと嘆じて居らるゝなれば私は九人の女子を慰めなければならぬ、又其上に望んで置かなければならぬことがある、アナタ方の爲して居る業は誠に小さい世の中の業の樣に人の目を附けぬ所ではあるが併し諸君の考へ次第でアナタ方は世界を動かすことが出來ると云ふことを申ふして婦人を慰めたいと思ひます。私は斯う云ふ考を申して婦人には一番あるホームを作るにありと申すはモウ一ツの理由がある若し今迄私の見聞せしことが誤りでありませんならば、信者たる婦人の中に少しく誤つた考が出て來たと思ひます、それと云ふものは一家を治めることを思ふよりは公衆の前に立ちて立派な演說でもするがエライ樣に思はれて居る、左れば女學校に通學して英文の手紙は書けるが家の小使帳を記るすことが出來ない、又甚だしきに至ては基督信者の婦人にして公けの會を主りて世の中に立てば演說も出來萬事樣子もよいが其人が家に歸りて見れば家は亂れて朋友親戚にも不義理の借金を拵へた婦人を私は存じて居ります、若し斯う云ふ考が我が日本に少しでも起りましたなれば、日本國は迚も樂しきホームを作ることは出來ません。

見よや見よ、彼の華盛頓を造りしは孰か、ジヨン、ウエスレーを造りしは孰か、デビツト、リビンストンも其母に由て功を奏したるものでありましよう。然し或は彼のメリー、ライオンの如き一家のことを措て公衆の爲めに働かなければならぬ人もあるには相違ない、併し夫れは其人にとつて誠に大切のことで神より命ぜられた所のものです、然れども婦人は百人中の九十人までは世の中の公けの仕事をすることが出來んもので只家の中を修め守らなければならぬ人と思ひます。此頃亞米利加でムーデーと云へる人と共に有名なるはサムジヨンスと云へる人です、始終面白いことばかり言ひますが或時公衆に向て說敎して言ふには今私は基督敎會を一の燕滊々關車に喩へ樣と思ふ、道を照らす所の光りがある、又危難等を報ずる爲めに滊笛と云ふものがある、又滊關車を動かす所の車がある、

アナた方は此教會を瀛關者に喩へたならば何にならうと思ひますかと、或人は申します、私は何うぞ光となつて暗黑を照したいと、ジヨンス氏曰く誠に尤です、又或人曰く私は車となつて此機關車を進めたいと、ジヨンス氏曰く誠又尤なる結構の御心がけです、或人曰く私は瀛笛とありてヒウ〳〵神の敎へを鳴り通したいと、ジヨンス氏は申しました誠に敎會には瀛笛となる人が多くて困る。嗚呼私の本國に小さい川があつて其中に河蒸氣がある、併し釜が小さいから餘り瀛笛を强く吹かば一度で船が動かなくなる、夫と同じく敎會も餘り笛を吹き大鼓を叩いたならば如何であらうか、笛を吹く人が餘り世の中に多くつて敎會を養ひ立つるものが少ないあらば遂には外形に流れて運動を止むるとが澤山ありそうだ、此時に隅の方から一人の老婆が出て來てジヨンス先生よ私は石炭となつて釜の中に焚かれたいと、ジヨンス氏曰く嗚呼淸き貴き人であるアナタ一人が石炭となつて世の中にも知られず火中に這入りて滿足するか、此人こそ眞に船を進め瀛力を生ずるものである、是に由て瀛笛も發し車も運轉するものである願くは此効能の偉大なる石炭を澤山に造りて彼の列車を幾千里に進めたいものであると申しました。

願くは愛兄愛姉よ我が日本の國又は信者は概ね瀛笛とのみなりたがつて笛を吹き太皷を叩きたがり家の中に在て精神を養ふ所の石炭となる人は誠に少ないではありませんか、或は其機關車が少々くるつては居りませんか、好しくるわないにした所が石炭は何程あつても用は爲します笛はタッター ッあれば其外には入りません願くは我等の兄弟姉妹よ此石炭を以て聖靈の火をもやし世の中の人には見へずとも火の中に入りて灰となり終るにしても其聖靈の氣力を全世界に與ふるとの出來る基督敎會の石炭と爲れんとをお勸め申します。（大尾）

○妻君の資格（其三）　紅雨亭　一枝　演舌

抑も社會は一の有機物なり其發達を謀らんと欲せば分業の法に依り天より命ぜられたる各箇固有の職を務めざる可からず今若し一植物躰に於て其一部なる葉殿が不平を鳴らし自分の職掌は實に詰らず朝より晩まで風に飄搖され無味無臭の瓦斯躰を呼吸するのみ彼の根の君を見て安閑として滋養でて〳〵香料澤山の液躰を呼收して誠に羨敷の限りなり吾も今より葉の生活を止めて根に變化せんとの妄想を起さば如何是決して成し得可からざるの事にして忽ち葉自ら凋落するに至らん爾に出たるものは爾に反る葉の凋落する是非もなき次第なり然

れども其弊や延て根本に及び終に全身枯死して蟻螻の玩弄物となるや疑を容れず况んや其花を開き實を結ぶに於てをや是を以て賢者「エピクテット」曰く吾人は生活に於て役の如何を擇ばず只自ら其役を上手に演ずると即ち吾人の義務なりと故に男子たる者は宜しく男子たり女子たる者は宜しく女子たらざる可からず世人は男子にして嬌嬈の姿優柔の擧動あるを見れば彼は女らしく男に似ずとて之を指笑するに非らずや是蓋し嬌嬈の姿優柔の行の指笑す可きに非らずして男子にして女子たらんとするが爲なり然るに若し女子にして粗暴の風あり快濶の行あれば其女子にして男子たらんとするを咎めずして彼は男らしく女に似ずとて之を賞揚す何ぞ前後矛盾するや固より人間は盡く男子たる可くして女子たる可からずとの確乎たる定義あらば余復た何をか言はん然れども神は世界創造の時に於て已に「アダム」の外に故らに「エヴ」を造れり而して男女兩性間の差異は啻に生殖器の相異なるのみに非らざるなり前に言へる世人の評の如きは恐くは男子專制の世に在りて男子の自惚根性の口より發したるものなるや明なり之を是察せずして女子亦た自ら此の如き言を爲すは愚も甚しと謂ふ可し。

婦女の職たる一家の妻たり母たるより美なる職務あらず而して社會の公益を保ち人間の幸福を增進する之に勝るものなかる可し然るに貴孃諸君は以爲らく一家の內狹隘にして驥足を伸ぶるの地に非らず宜しく社會智力の戰場に於て功績を奏せざる可からずと是何ぞ木葉の根本を羨むに異ならんや余は一家の必要を論ずるに當り獨逸の倫理學者ドクトル、ウイッス氏の說を左に譯述して少しく勞を省かんとす、

一家は人民開化の堅全なる基礎にして品性を養成する必要なる最始の學校なり人間敎育の善惡邪正此地に發し吾人が品行の大原則を腦中に吸收するも亦た此地なり世に志想は人間を作爲すと謂へる如く亦た家內は人間を作爲すと謂ふを得可し凡そ家內に在つては心自ら開き習慣自ら生じ智慮自ら起り終に善惡の性各々其形を成すものにして今日一家の生活に於て兒童の精神に蒔きたる所の種子は他日世界に於て發育生長して一國の志想と爲る國民は皆子供部屋より拾集せられたる者なれば如何に政府が壓制の手綱を手にして之を制御するも其勢力は習歩紐を以て之を導く（幼時の敎育を云ふ）に如かざるや明なり故に一家は有力なる開化養成の學校と見做さゞる可からず固より兒童の性質を養成

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

するの時に於ては其勢力實に微にして著しく人目に觸ざるが如しと雖ども其力は終身其身を去と能はず吾人は曉天を見て其日を卜するを得が如く亦た兒童を見て以て青年を卜するを得るなり實に青年は兒童の核實と謂ふ可きなり。

若し愛情と義務の二つありて一家を浸潤し腦及び心の二者が能く賢明なる制御を爲すあらば其家は必ず己に克ち父母に仕へ長上に從ひ又同胞の安寧を企つる幸福有爲の人を出すや疑なし然れども之に反して姦淫無智利慾の氣其周圍を繞ふ時は其中に生長する兒童は不識不知其性質を受ざるを得ず古昔或希臘人曰く若し奴隷をして汝の子を敎育せしめば汝は二人の奴隷を得るなるべしと凡そ兒童は其目に觸るゝ所のものを摸倣するより他に爲すとを知らず所以運動言語性質等總て其龜鑑ならざるはなし而して不絕兒童の目に觸るゝ所の龜鑑は即ち母なり母は一家中の心の磁石なり目の極星なり其行爲は一として摸倣せられざるなし故に母は己れの行爲に依り例を出して之を敎育し例を示すの外又他に敎育なるものあらず是を以て母は兒童の品行及び性質を養成するに於ては父よりも遙に其勢力を有すると大にして恰も一家は母の總督する一王國に異ならず其微弱の躰に向つて働く所の勢力は實ゝ測る可からず母の習慣は變じて子の習慣となり母の性質は傳へて亦た其子の躰に存するものとす。（未完）

私は女權擴張に至極贊成でげして、夫故過日も家内に說得して聞かせましたので、夫れに彼が聞入ませんから、夫れで彼れが頭まをブチましたので、どこ〳〵迄も女權擴張の爲に盡力したいと云ふ所存で。……

批評

○女學記者、日本を愛せざる乎。

先頃ろ、或雜誌に於て此の問を立られたり。因て吾人は、女學雜誌第百二十四號に大略の答辨を爲し置たると、讀者の尙ほ記臆せらるゝ所あらん。然るに右の雜誌は更らに此の答辨を難じ、吾人が、

吾人は日本を愛する者として、只其美を顯へし惡を掩へんと爲さず、專ら其實美を增さんとを希願す（中畧）國民誰か外邦に其國美を顯へすとを願へざらん、之を願ふが故を以て、其國弊を外邦に曝露するは即ち此弊を矯正するの功を爲すのみ。

と云ひたるを駁し、

彼記者が前には「其美を顯へさんとせず」と云ひ乍ら、忽ち語を轉じて「國民誰か其國美を顯へすとを願へざらん」と云ふ、これ前後矛盾なり、

云々と言はれたり。是では實に困る、吾人は「其美を顯はさんと爲ず」とは申さず、「只其美を顯はし、惡を掩はんとはせず」と云へり、只の一字、及び「惡を掩はんとせず」の一

句に御目を留めらるべし。記者亦云く、

且又「國民が國美を顯へすことを願ふが故に、國粹を發露するは即ハち其の弊を矯正するの功を爲すのみ」とは、ドウ考へても解しかぬる説にあらずや。……記者已でに國粹の露へれんことを恐るゝの一人にてあり乍ら、殊さらに恐れずして之を露へさんと欲す、自家撞着にあらずや。

ドウ考へても解し兼ぬることあらば致し方なし、夫にて置かれたし。扨て吾人が、「恐れ乍ら尙國惡を露れさんとする」は、自家撞着なりとあり、然し國惡を露れすが、國美を増すことと相成らば、幾ら恐ろしひとも少と奮發せては相成申さず。

面倒なれども、も一ツの御詰問は、さきに、

吾人が頭○には西洋人日本人の區別なし、何れも人類として之を惣愛するなり、然れども箇々が其の箇々を特愛するは、人類惣躰の大發達に必要なるが故に、即ち吾人は○一身を愛し、ホームを愛し、故郷を愛し、日本國を愛するのみ、左れば吾人が胸に於て日本國民を愛するの愛は敢て他人に譲らず……吾人は日本人なり、日本を特に愛するもの也、

と述たるに對し、

頭に彼我の區別なくんば、何れの處にか其の區別を附けん、已に區別なしと云ひ、又特に我を愛すと云ふ、これ亦前后矛盾と云ふべし。

と難ぜらる、どうもく實に困る。彼の記者は、好くも吾が文を讀ずして、特更トボケ玉ふのみか、ヘッド(頭)即ちマインド(腦力)と、ハート(胸)即ち(心)の區別をも御存知なき如し。

○女學

女學の二字に付て、吾人と經濟雜誌記者との論爭は、女學記者の全勝を以て既にトックに相濟みたる所ろ、在獨逸留學の竹水女史は、七月廿一日發の投書に因て左の小評を送られたり。再び申出すは好まざることなれども、朋遠方より來たれば、亦た悦んで接待せねば成らず、遂に其まゝ之を掲ぐ。

女學に就て、　餘計の提灯持なれども。

今日我國は新開國にして隨て新風俗は勿論新文字等の出づるは敢て不思儀にもあらず經濟記者は大に御不興の由し依て妾も何故世に不經濟雜誌あるものあらざるやをいぶかる者なり。

○近時の女學論

（一）。　穗積博士、婦人の勇氣

去る十日發兌、羅馬字雜誌第四十號に、穗積博士陳重君が演説せられたる、婦人の勇氣の説一篇を載す。大意に云く、

男子は生れ乍ら剛毅活潑にして、女子は生れ乍ら優美温柔なり、斯く万事物柔らかにして優しき御婦人方に對し、勇氣の必要を説くはちと無理な注文の樣に聞えるかも知れませぬが、然し左樣な優しき生れ附のもののゆへに、別して幼少の時より勇氣を涵養することが大切であるは、喩へば水の乏しき土地では井戸を堀り水道を引くが必要なと、同樣な

ものでありませう。

何又、一般に申せば、男子は道理を學び、道理を聞き、道理を悟りますれば、之を實行し、之に因て支配さるゝとが割に容易すくありますが、婦人は之に反し、扨て之を實行しやうとなると、兎角に感情の爲に縛られ、中々實行の出來兼ぬるとが多くあります。夫故へ、亦自づから習慣の奴隷と爲り易う御座りまして、隨つて婦人には守舊黨が多い。

但し、婦人は稍もすれば慣習の奴隷と爲り易きものですから、何事でも變はる事は惣べて嫌らいかと尋ね見ますと、婦人ほど變はり易きものは有ません、即はち亦た流行の奴隷で、髮形ちより衣類着物に至る迄、時のハヤリを追ふて始終に變化いたします、之も矢張り感情の爲に支配せらるゝが故である。左れば、流行の奴隷と爲るも、感情習慣の奴隷と爲るも、形ちこそ違へ其の精神は同じとです、言へば、慣習は變はらぬ流行、流行は變はる慣習、慣習は永き流行、流行は短かき慣習であります」。扨て、如此く婦人は主もに、感情に支配さるゝものでありますが故に、婦人に勇氣が大切じやと云ふのであります。

然らば何を婦人の勇氣と云ふ乎、と申さば、必らずしも巴御前や板額の樣に、千軍万馬の中に往來し、根こぎの松の木を振廻し、門の扉を押し破つたりするやうな、エライ強い事をするのをさすのではありません、又た國が亂れ、家が亡び、夫が打死をいたしたる時に、眞に立派なる行ひのあつた婦人は、歷史上隨分多くあります、然し私しは斯の如きとばかりを勇氣とは申しません、即はち、亂世の勇氣よりは、平常の勇氣こそ反つて大切であります。

然らば私しが申す婦人の勇氣とは何如なるものを指すのであります乎。私しは、婦人が道理を聞き、道理を學び、道理を悟れば、必らず之を守り、必らず之を行ふの氣慨を指して、婦人の勇氣と申すのです。私しは、婦人が感情情慾等の誘惑に抵抗し得るの氣象を指して、婦人の勇氣と申します。婦人の温柔なるは、即はち婦人の美德で、決して之を失うてはいけませんが、然し、此の温和柔順なる中にも、必らずチヤント守る所ろがありて、其の守る所は、たとへいかなる事ありとも動かぬようでなくてはいけません。

之れ其の大略にして、而して未だ全く了らざるあり。特に末段の勇氣の解の如きは當今尤も適切の注意なりと思はれたれば、今先づ此に抄出して讀者の一覽に供ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(二)。榊學士、婦人科患者の調査報告

去五日出版、東京醫學會雜誌第十七號には、榊順二郎氏の報道に係る、婦人科患者の調査報告あり。眞とに有益細密の研究なれども、其論未だ完からずとあれば、他日其の悉く揭げ了らるゝの日に於て、一讀の上へ考ふる所を記すべし。

(30). 日本婦女の地位(一册小本廿四頁定價十錢 發兌所東京通二丁目小林新兵衛)

此書は、伴直之助氏が曩に東京婦人矯風會に於て演述されたるもの、筆記を印刷したるものにて、本文は嘗て女學雜誌第百三號より第百六號に至る迄でに揭げたるものと大同小異なり。一篇の大主旨は、

男女同權果して我國に行へるべきや否や其論は暫く措き、我國の姉妹にして其地位を進めんとせば、斯の如き理論に耳を傾くるなく、先づ手を家政の改革に下し其の妻と爲り母となるに當りて善く各自の本分を盡し、夫を助け兒を育ひて以て國家の文明を裨補せられんと、余輩が希望して已まざる所ろなり、諸姉も此の大任を盡して而して餘力あらん乎、則ち宜しく直接に力を社會公共の事に致すべし、果して斯の如くんば諸姉が地位の昇しからんを欲するも輿論は之を許さゞるを何如んせん、

と云ふに在り、眞とに御尤もの事に思はる。

雜評

本號には餘白なきに付き、集まり居る書類の甚だ多きにも係らず、不得止、此の一欄を略す

生は實に卿を想ふに因つて將に死せんとす、何卒一日も早く御答を與へられたし、若し御聞入下されずば、亦外に問合すべき所ろの候ゆゑ也。

叢話

○マーテン、ルーテル及び婦人の價値

宗教の改革者、耶蘇新教の開祖、剛勇正々の英雄たるマーテンルーテルは云へり、凡そ教道の宣教者と、彼の婦女子とを攻撃する所の人は、何れにしても大抵は物事に成功すると能はず。抑も婦女子は後來の子孫の母にして、家族と國の共和とを結び付くる所のものなり。左れば婦女子及び宣教者を輕蔑するものは、即ち神と人類とを同時に輕蔑する者に均し。

○戀愛の德

戀愛の德大なる哉。吾人もしスカットならば斯くぞ咏はん、

太平の御世には羊飼ひの角笛に鳴り
戰亂の時世は勇士が馬上にうち乘り
美ある書院に於ては艶ある衣も着て
賤が小舍には緣なす草座の上に踴る
戀愛は陣所にも宮室にも森かげにも
下界の人また天上の天使にも住はん
戀愛は即はち天天は即はち戀愛なり。

○夏休み後、女學校に歸りたる女生徒(上)

夏休みの初め、古郷家族へお歸りになる女學生諸君に向て、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嘗て一言の忠告を申したる因緣もあれば、此度は亦た當節學校へお歸りになり、夏期休業中に肥え太られたる、勇氣勃々の身躰及び精神を以て御勉强あらんとする方々に向つて、亦同じく一言の注意を申し上げたい。

學校の書生は、兎角慌て過ぎ急き込み過ぎて困まる、特に女學校の生徒方は、たゞ何でも進めば善い、只だ何でも早く卒業すれば善いと、先き〱と進んで着實で無いのが玉に瑕である」。左れば、其の書物を讀まるゝも亦全く左樣で、たゞ早く此の本が讀擧て仕舞たい、只早く多くの書物が讀んで見たいと云ふが、多數の女生徒の夢である。然し好くお考へなさい、もしも只だ早く多く本を讀むと云ふが書生の望みであるならば、實に詰らぬとである。何故と申すに、前年アリボンと云ふ人が調らべたる所に因れば、英吉利文字にて認めたる書物は凡そ五十万巻ある、而して其中是非讀んで爲にあると云ふが五万巻ある。然るに人もし一日に一百頁を勉强して讀みたりとも、一年に百巻よりは讀めず、五万巻を讀了るには凡五百年も掛るとの話しで、左すれば東方朔にでもならねば、中々英國の書物の卅分一も讀通すとが出來ますまい。所ろが、今の日本書生の讀むべきものは啻に英吉利の書物のみでない、少し高尙の理窟を學ぶには獨逸の本を讀まねば成ず、美術文學を硏究するには亦佛蘭西書を讀まねば成ず、其上支那の書物、日本の書物と、凡そ讀まねば成ぬ書物は實に莫大の事であれば、只だ本を多く讀むと云ふ許りに骨を折つては、何如ほどに骨を折たりとも讀み得る丈けは實に少ないとであらう。夫故へ、之にのみ苦勞して、只だ譯もなく讀たい〱と云つてアセリにアセルは、實に詰らぬとである。

然らば何如にする乎。學校の書生は先づ本を讀み得るの力を養ふが宜しひ、力さへあらば、何如なる書物でも、何如なる六かしひ本でも讀める、即はち自分が見たいと思ふものは、皆な之を見て之を解するとが出來る。然るに、今の女生徒が往々爲さるゝ如く、何とか申す譯解の書によりて、リードル讀本を較らべて讀み、第一讀本より第二讀本、第二讀本より第三讀本と、たゞ急ぎ〱て之を讀み、よく之を暗誦する迄に覺へ得られたりとも、其讀まれたるは僅かに四五冊である、其覺へられたるは僅かに四五冊である、而して其外に何にも無い。之は實に大なる損で、斯ては何れ程讀みたりとも眞とに効能が無いから、願はくはホンノ冊數を畢るとを望まず、只其の讀書の力を養ふとを專一に主となされい。世上の書籍は

森々たる森の如く多くある、もし其の木を一本一本に切つて所持しようと思へば、人生五十年何如ほどの材木が出來よう、况して五年七年の學校に居る間だに、何如ほどの收得が出來ませうや。夫では行かぬ。寧ろ玆に鋭どき大刀を用意し、此を以て何れでも切れると云ふように仕度なさるが、良策であらう。夫れ故、女學校の生徒は、只だ本の早く進むを望まず、只だ本の早くアガルとを望まず、一枚でも、一冊でも、能く讀んで、嚙み分けて、自分の物にして、而して能く之を記臆し、着々、沈々、極めて落付き、極めて緩やかにして進まるゝ様に致したいとである。(次號にて終る)

○一唱百歎

渡邊華山

麻繩にかゝる身よりも子を念もふ親の心をとくよしもがな

高野長英

歎かるゝ身よりも歎く老の身を歎きこそすれ歎かるゝ身は

藤田東湖

なきかずに入るぞかなしき芳野山花のあらしに心のこして

古人眠早く覺て夢は六十の花に過ぎ一生栖おろかにして心は茅店の月に嘯き身は板橋の霜に漂よひ白頭の雪は積れども老を養ふ瀬川の水やこゝろを清むらん(養老)

小說

○哲女の巻

第三章、末摘花(下)

月の舎　しのぶ

之を以つて男子の女らしきは吾人尤も之を惡む、女子の男らしきも亦た固より感服せざる所ろ也、彼の家を修むるとを輕ろんじ、子を育て夫を助くるとを輕ろんじ、甚はだしきは結婚を輕ろんじ、遂に自から奔走激論して女權を擴張すと云ふものゝ如きは、吾人甚はだ之れを感服せず、蓋し吾人は女子の女德を養わんとに尤も贊成する所のものなり。然りと雖も毫末だも之が爲に女子の大學入校を不可とするの理由あるを見ず、此と彼とは全く別問題に屬す。

ミル氏の夫人は經濟學に長じたり、夫人は之が爲に良妻たるとを得ざりし乎。ブローニング夫人は詩歌に達したり、夫人は之が爲に良妻たるとを得ざりし乎。ブホーセット夫人は女權擴張の率先者なり、夫人は之が爲に良妻たることを得ざりし乎。而して此等の良妻は亦た、賢母たることを得ざりし乎。吾人は傳記歷史によつて皆な其の然らざるを知れり、故に女子に高等敎育を與たふるが爲めに、其の女德を損すると云はゞ、之れ甚はだ事理を知らざるの論なり。

妻にして夫を助くる、母にして其の兒を教ゆる、豈に只だ割烹運動のみならんや、大學者の妻として其の良人に貞ならんと欲せば、夫人先づ高等の學あるを要す、母として大偉人の子を養成せんと欲せば、夫人先づ高等の學あるを要す、吾人が女子の高等教育を切望する所ろのものは、即はち女子をして尤とも高く其の女德を發達せしめんとを欲するが故也。バックルは云へり、智識進歩に達する女性の功蹟尤とも大、もし女性なかつせば、歸納法はいよ〳〵無味に流がれ、文學は益〳〵乾燥に失し、世を擧つて遂に實事實物の奴隷たらしめしならん、其の然らざりしは大ひに女性の功蹟に歸すと、大學士にして大學婦人を同伴す、其の効益果して幾干ぞ。

自然放任は造化の槌なり、之によつて事物悉く其性に振り出さるゝを見る

甲。ナニ〳〵モ一度讀み玉へ、分りやしない

巳。ドコサ

甲。其の槌とか何んとか云ふ所ろさ

巳。矢釜しひチー

自然放任は造化の槌なり、之れによつて事物悉く其性に振り出さるゝを見る、試みに一家内に男女の兒を置け、而して之れに同樣の自由を與たへよ、男兒は男兒となり、女兒は女兒となるべし、天下もし女性を壓制することなくんば、女性は必らずや、演說せじ、必らず女權論を吐かじ、必らずや老孃たるを以て誇らじ、必らずや政事上社會上に男性と競爭することを爲さじ、則はち優として安んじ、温として靜まり、沈々として內を納め、寂として男性を助け、忍耐高尙、敢て自から制して且つ能く其の本分を盡さん。但だ夫れ、此に激するものあつて、而して後ち靑靴足袋は現らはれ來たる、女權論者現はれ來たる、獨居先生現はれ來たる、女性外の女子續々として現はれ來るもの也。

他人吾が手を引て吾をして鍛冶屋たらしむるを要せず、腕强よくんば吾自から鍛冶屋たらん、女性は其の演說塲に在り、政事海に在り、大學に在り、米國に在り、魯士亞に在るに拘はらず、世人にして若し先づ之を激するなくんば、敢て女性以外に走らざる也。

吾人固とより今回の大學評議會々議の結局如何んを預言せず、然ども若不幸にして、女子をして女性たらしめんが爲に其入學を禁ずと云はゞ、之れ即ち先づ女子に其尤も高尙

に其の女德を發達するの道を奪ひたるもの也、又先づ女子に其の女性を離れ、激して變性男子たらんことを決心せしめたるもの也、果して然らば吾人は女粹保存、女粹發育の爲め尤も慨歎して止まざるもの也。

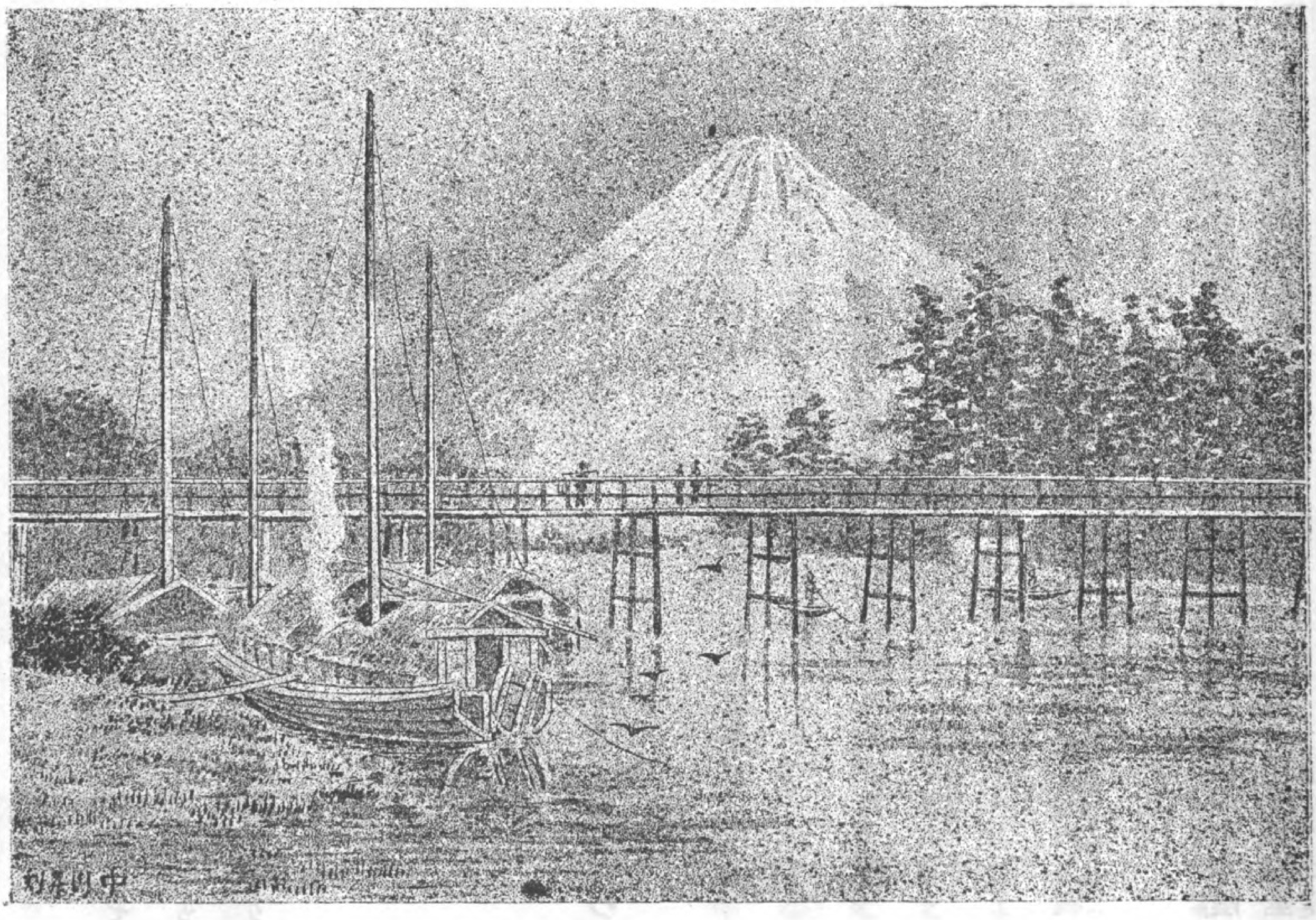
甲。ヒヤ〱

丙。甘い〱、極々贊成を表します。然かし、吾黨の味方のやうな、敵のやうな、何んだか、變な言まわしだことテー

巳。然し、之れは甘く言まわしたのではなくつて、之れが女學雜誌の持論ですワ、ソラ何日でしたつけ、「吾人の意見を明らかにす」とか云つて、大層堂々と論じましたテー、あれも矢張り、之と同じ考へでしたワ。

乙。然し、女子のハイ、エヂユケーション（高等敎育）に反對な人は、衞生の事を矢釜しく言ふんですワ、夫れは何んとか書てあるんですか。

巳。有るとも〱、夫れは斯う言ふんです、男子を目的にして立た大學であるから、時間割などが女子に適しないは、尤ものことだが、先づ生物學と云ふ一科のことに付て考がへても、女子に左程不都合な所ろは無い、好しあるとしても、夫れが第一の不都合ならば、特別に取扱かひの仕樣



もあらう、大學評議會が、もし吾人の意見の如き意見にてあらば、其他の事は何如にとも取計らはれやうと、云ふんですが、大學のことですもの、レクテウア（講義）は一日に二三時間しか在りますまいシ、其の他は自分で研究するんですから、入學した女が、一人で躰を用心すれば好いんですワテー。

戊。何如なるでせう、許されるでせうか、何うでせう。

丁。其の四條哲と云ふ人は、何處で教育されたんでせう。

巳。秦さんの御親類でしたテー、秦さん。

秦。エー左様です。

丁。チヤさう、ちつとも知らあかつたワ、お幾つ位。

秦。今年で取て二十二でせう。

丁。さうテー、未だお若いのダテー、何處の學校に入らつしたの。

秦。別段何處へも行かなかつたんですが、大抵は私しの父が敎へましたのでせう

巳。ろう〳〵秦さんのフハーザー（父）は、大相學者で居らつしやるツテ伺ひましたワ。

秦。何んですか、サイエンス（科學）が好だつて、氣狂の様ですワ、でも別に深いとは知らあいんですよ。

甲。だから、何日でも秦さんに負けるんだよ、悔しいワ、そんあフハーザー（父）があつて、そんな親類があるんだもの、ヘレヂテー（血統）から云つても、負ける筈ちやありませんか、仕方が無いわ。

丙。血統の無い方が、結構ですよ、自分の働らきだから。

甲。チヤ又き〵ませんよ。

秦。チホ〵〵。

時に八九才の可愛らしき女生徒、手紙を持つたま〵驅け來つて、大息つぎ

ハイ秦さんお手紙、サンクス（有難）とお言なさい

秦。サンクス、サウセンドサンクス（千謝）

甲。テンサウセンド、サンクス（一万謝）ハンドレッド、サウセンド、サンクス（十万謝）

女。イヤナお甲さんテー、イヤーナ。

甲。何ですて、カム、ヒア、マイ、チヤルド（お出あさい）

女。アイ、アム、ゴーイング（イ、エ、參ります）

秦お好は手紙を見て、さも嬉し氣に袋を開き、傍はらの木陰に立よつて、讀下せば、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

愛する所のお好よ其後はかはりなきや父事も一度學校ゑ參り色々お談したく思ひ居りしに急に用事出來今日の船にて歸京いたし候くれ〴〵も躰を丈夫にし先生方の敎を能く守り安息日には必らず敎會に行きお友達には深切に交はり平生心がけを優しくして夢にも哲女の如く成り玉うな先達ても申せし如く實に〳〵哲の爲には幾度か淚を落し候ぞ二親なき故のひがみも有んが神の道の事など耳にも入れず始終人を疑がひて少しも優しからず失せし兄姉に對しても父が面目なく歎き居候此上はお前こと何卒〳〵心を淸くし立派なる女德を具へ切めては行末心細き此の老父を慰さめ呉れよかし最早お休みにもなり候半何れとも先生の仰せのようにし何方へか行けとあらば只だ感謝して伴わるべし歸京の上は又々手紙を送り可申此度の試驗は何如なりしやそれこれ東京に向け御知らせありたく候氣候も余程にあつく成りたりよく〳〵用心せよ最愛の吾兒よグードバイ

愛兒よしどの　　父より

くれ〴〵も躰を丈夫にし何事も余り心配せず不自由の事あらば遠慮なく申越さるべし又鴨川のすゞみ追々とさぞかしに思へど先生方と御一處ならずば行き玉ふな演劇見物は固く禁物なり尙ほ扇は注文いたし置たり近日御影堂より持參せば兼て申せし如くそれ〳〵へ御配り忘れまじき事以上

好は滿目に淚を曇らせ、手紙を巻き乍ら欝々として校内に歸り、獨り敎場に入つて靜かに机前に跪まづく「ヲー天に在ます我等の父よ、我愛する所の從妹を許し玉へ、我最愛の父を惠み玉へ」、心の淸きものは幸わひなり、其人は神を見るとを得べければ也、廣き敎場寂として人なし、少女が誠實なる心を見玉ふ所ろのものは、あゝひとり在まさゞる所ろなき吾等の父なるらん。

◇　◇　◇　◇

○さすがに双紙

第六回　世は塞翁の馬くばかりは行かぬ物。

美妙齋主人

「あゝ阿時、本當に乃公も安心した。御前もさぞかし嬉しからう。乃公も實にうれしいて」。

言ふ聲は時子の父親ので部屋には時子と父親と二人しか居ません。

何がそンなに嬉しいのか、父親は顏を南風の飴にして、

「親の心といふものは……男の子を持ッたものも左樣だらう

……妙齢の女の子を有つとそれにつりあッた若い男によく目が注くもので、あの人の氣立はどうだらう、才智はどうだらうとそれは〳〵探りたく爲ッてくる物で……まァもゥ御前もみづから擇んであの花房さんを夫としてもいゝと言ッたから乃公も安心したが、今までのうちハ隨分こはいやうな樂しいやうな事だッたよ。　花房さんも承諾したし、乃公ももゥ苦勞する處も無い一日も早く夫婦になッて御前たち二人で」……

思ハずも出る微笑の涙を弄ぶやうな躰で目口耳の邊へうろつきまはらせ、

「それ家を持ッて御前が御自慢の家政をうまく行ッて……ふゝん、阿時、乃公もうれしいよ」。

この仔細では父親が喜ぶのも至當です。　因ッて考へればどうかの張合から時子と花房とが夫婦になる事が決ッたと見えます。　親はさながら（下手な形容ですが）胸の中へ手を入れてくすぐられるやうな感じが爲、それでまた……いゝえ、もゥ時子の方は……それは言ハないでも分解ッて居ます、自分が愛敬して居た人を六十年の友とするのです物を。

日に萎ばぬ花も雨にハ羞を含みます。　日來は心がたしかであッても……あゝ淑女です、爛熳たる天賦の愛嬌、紅の潮が……それを寄せたくないのは山々です……けれど早晩耳の濱、頬の磯邊を沒して仕舞ッて……その瑠璃を列ねた双の眼も俄に重量を加へて疊の上へ落ちます。　が、此遺失物は人に拾へません。

親の胸には亂拍子。娘の胸にも亂拍子。中々うるさい胸どもです。　凡の幽靈なら足がありますまいが、此度の時子の挨拶は頭が無くて足が無い女夫幽靈とでも評しましやう。

「……くひん」、新發明專賣特許類の無い笑聲が何のためだか出ましたが、實際をかしくも無いのです、また處女氣といふ物がむしろ嬉しさの笑顏を引留めて隱して居ます。

「……くひん」……○ろいろ御骨○りで……まァ……○りがたうムい○○」。（○は聲の低い符號です。作者）。

「宋人の四喜の詩には洞房花燭夜とあるが、そりャア自身ばかりぢやァ無い、その者の親の身になッても。　だが、阿母さんも生きて居るならやッぱり一途に」……

「嬉しがるのだらうが」と言ひたいのですが言へません。

善につけ、惡につけ、したしい人を思出すのハそれは無理も無いこと、人間の常情です。うれしい中でも親子二人は意地わるい涙に見舞ハれて……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

折から門口へ音信れた車の音。「そら花房さんが御歸りだ」。いそ〳〵とする身の素振を故意と重々しさの餡掛豆腐にして時子も立ッて迎接に出と、花房ハはやもゥ部屋へはいッて來ました。え〻這入ッて來した、今日はもゥ他人行儀を廢して。

「大層御はやう厶いましたね」。父親は團扇を振ッて挨拶と愛嬌と涼風とを煽付けて居ます。

「いえ、貴君、もッたいない、どうぞ其儘」、忝い風を僅にさしとめ、「つい手間取りましたので遲くなりました。どうも今日は暑いではありませんか。腦の中がまるで沸騰するやうです」。

「え〻、戸外を步行いて御出でなさッたら左樣でしやうよ。家に居てさへこのとほり」、人魚の油か何かのやうに珍らしさうに汗を見せるのも親しくなッた證據です、「裸躰に爲ッて御涼みなさい」。

「え、それほどでも」。流石に花房は辭退しました。

「なゝ好う厶いまさア、もゥ他人では無し」……

「他人では厶いませんが」、時子の方を見て花房も笑ひながら「まさか私ゝは……こんな踈暴家ですが……他の前は無論、自分一人で居る時でも野蠻な眞似を爲る事はだうも出來ませんでねェ。全躰男子だッて他の前で肌をあらはすといふ法は無い譯です。暑いから裸躰になるといふのはまだ着物を一枚着て居るといふ考があるからです。肉襦袢となッて仕舞へばいくら暑くッてももゥ其上は剝がれぬと思ひますからそれで滿足するのです。そンならはじめ着物を一枚着て居ぬもの、その着物は脫ぐべからざる物と考へて心を決めてさへ仕舞へば脫ぐ氣になるわけはありません。特に婦人の前なんどで肉躰をあらはして見せるのは……ねェ貴父左樣ぢやムいませんか」。

時子の父親が花房に肌を脫げと勸めたのは決して心からでは無く、花房の心を引いて見る表向の言葉だと察しましたので花房も(無論平生も品行は宜う厶いますが)このやうに言ッたのですから、まづ駁擊されたやうなものですが、父親は却ッて大に感服しました。交際法の要點は此處にもあります。

想像、い〻え、むしろ妄想といふものはさながら導火を待烟火の樣です。あらはれ〻ば紅ともなり、黃ともなり、青ともなり、綠ともなる色々な材料を伏て待て居一旦奬勵する物に出遇時には倏忽時を得て飛揚り、空中に樓閣、消やすい樓閣を作ッたり、前後左右に暫時の色を走らせたり、それを知つゝ知

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ながら勇ましいとも、また美しいとも思ッて居ます。時子親子は云ふまでも無く、花房に至るまで婚姻の契約に呼出された將來の妄想はしばらくも胸の借家を退きません。その借家で子が子を産むやら、眷屬が仝士討をはじめるやら、その騷は非常ですが、しかし又取鎭に來る虛心平氣といふ巡査もありません。「何處で婚禮を‥‥紅葉館‥‥曠遊館‥‥御馳走は‥‥招待の人數はまづ凡‥‥それから以香保へ「甘露の月」（ハチームーン）‥‥二週間も滯在して、その入費が、え丶、斯うと」‥‥

今日は花房は今迄下宿して居た宿へ歸るといふことで、しばらく雜談に時を移し、その雜談の切れた間々に妄想の遊歩を爲せて居ましたが、やがて屹と思直し、立歸らうと身繕をする途端、案内も無くつかつかと入つて來たのは一人の巡査です。

「花房さんとは貴君ですか？」巡査は花房に問掛けて更に言葉を繼ぎ、「少々尋問の廉が厶いますから拙者と御同道なさい」。

「私にですか？」耳を信じない躰で花房は問ひました。

「はい、委細は其上わかります。」

○小說神髓

蘇格氏著　ケチルチルス　（第二十八回）

レスター侯は大に怒てバーチーに對ひ左程迄に委しく知り乍ら何故早く之を告げざりしぞと怨言したるに、バーチーはまことしやかに答へて言ふ樣速くより申上度は存じたれ共なまなかにエメ殿に逆ひ申したりとて若し其淚一滴君の御膝の上に落んには私が如何ばかりに辨じたる言の葉も乍にして吹き去らるべしと存じ強て忍びつ丶今日に至り候ひつるが今朝フホスター數多の證跡を擧げて訴へ參りたれば扨こそ初めて斯く明白に申上候也、レスター侯愈怒りかくばかりの證據にして不明ならば何の證據か信ず可らん今悉く之を信じて罰を與ふるとも何人か予を輕卒なりとせん察するに彼が平生深く汝を憎みたるは汝が彼の秘密を察知したりと覺へたるが故ならん然るにても予をすゝめて陛下の御前にいたらせ是迄の罪惡を白狀して假令首を斬らる丶共寧ろ身を潔くして正道を守るべしと勸めたる其言葉は今もなほ予が耳に殘れり天の使と雖も斯る高尚潔白なる眞理を斯く迄に氣高くすゝめ得まじと思はる丶に其の淸く正しき所の心をもて如何にしてか斯かる不潔の考を回らし其不正直なる口を以て如何にして斯る勢ある

言葉を演ることを得べきぞ汝は平生物事を冷淡に考ふるものなれば今此迷ひたる予に對てエメの無罪なることを證するの道はなきか汝若し其論理を見出し得ば予は愈汝の才に服すべしと言ながら心中無限の苦しみを面にあらはし痛嘆左こそと思ひやられたり。バーチーは曲りながらにも主人を愛するものなれば今此の言葉を聞て人心頓に起り急にレスター侯及びエメを愍むの感を生じたるが否々只今此苦しみを與ふるは後に大なる榮を此主人に歸することなりと思ひ冷淡に此仁心を揮ひ捨て曲げて詭言を主張して曰くエメ殿にして若し全く罪なくんば何故カムナプレスより此城迄逃來らるべき必竟レスター夫人と呼るゝことを願ひ兼て君の御迷惑を存じながら遂に此城迄來られたるものと存候。レスター侯是に至て百忍全く絶へヨシ最早辨ずるに及ばず予は悉く彼の毒婦の計略を察したり彼は予をして陛下の御前に白狀せしめ同時に彼が予の夫人たるとを證據だて置き予が陛下の怒に觸れて遂に首を斬らるゝ後法律に依て予が財産を受取りトレッセリアンと其の護物を山分けすべき計略なるべし最早予は彼の女の血を見ずしては決して止まぬ。バーチー餘りに侯の激するを見て少しく之を慰さめんとしたるが、侯は言ふ汝決して予を止むる勿れ既に神の律法にも人の律法にも背きたるものは斷じて之を宥すべからず斷じて之を宥すべからずと狂氣の如く叫びながら突然走り去て其の室に駈け入り内より錠を閉したり。

佳傳

○米國獨立革命の婦人（下）

ワルレン夫人先づ斯の如くなりければ、之と志を同うして獨立革命の事に盡力したる婦人方甚だ多し。何れも英國政府の暴逆を特の外に怒りて、只管ら之に反對の人心を引立て、先づ茶其外英國よりの輸入品を退けて一切之を用ひざるように心掛け、反物織物の類は手づから之を織りて輸入品を防せぎ、所有の持物を義捐して軍費と爲し、錫鉛の器具を鎔かして彈丸を造くり、拮据して小麥を耕作し麵包を製して貧しきもの及び軍兵に送り、それ〴〵の品を用意して病院に在る手負の人々を見舞ひ、特に牢獄に囚はれたる米人を訪ふて手には其の不自由なる品、口には尤も深切なる言葉を提さげて之に與へ、獨立を不賛成の男子を罵りて之を辱かしめ、可憐の娘孃も郎が兵役に應じて革命軍に入らざれば結婚の申出を退ぞけ、其の愛人の死躰を戰場より引取るに際しては米國の女

は皆な泣かじと相盟ひ、特に亦た敵軍の兵と云へども既に死して尸を野原に曝らすものを見ては、今生の怨恨を呑んで之を埋葬し遣はし、亦た其の子供等を敎練して之に忍耐敢爲の氣象及び自由正義を慕ふの念を養はしめたるなんど、悉く是れ革命時代に於ける米國婦人の習らひなりき。内に此の貞烈なる婦人ありては、如何に貧し氣なるデービドと云へども、其の遂にゴリアの如き大英國に打勝ちたるは、抑も謂はれなきにあらず。

一千七百八十年は、獨立軍の爲めに不幸多き厄年なりしが、當年の冬と相成つては、軍器糧食全く欠乏し、後より之を補ふべき望みもなく、特に海濱に屯在する英軍の砲隊は、見當り次第に商船を擊つて物品の運輸を斷ち切りたれば、米軍の困難一と方ならず。嘗てプロシア王軍の副總督と爲り、彼のフレドリッヒ大帝より軍法を直傳したる、少將スチウベン(此時米軍中に在り)の如きすら、此の困難の中に於て今より一週間にても米軍を恙がなく統治し得べき將官は、當今全歐を見渡すに恐らく一人もなしと申したるほどの有樣なり。斯て最早一條の望みも之れ無かるべしと思はれたる所ろに、先づフランクリン氏の令孃を初めとして、數多の愛國女軍忽焉として起り立ち、フヒラデルフヒアの府中を驅け廻わり、一軒一軒に說き廻りて、出來るほどの義捐金を集めたり。左れば、女性自身は固より其の第一の義捐者にて、或は寶玉の飾を取去り、或は客間に飾つたる珍奇の品を取出し、悉く之を金に替へて捧げたり、憐れなる印度人の女迄も、辛ふじて蓄はへたる其の賃金を全く義捐し、ラフエーテ氏の夫人は一百ギニアを寄附し、ルゼルン伯爵夫人は六千弗を寄附したれば、僅かにして金貨、即はち此時に於て尤も價高かりし金貨にて、凡そ七千五百弗を集め得、之にて軍服を整へ、軍糧を用意し、直樣彼の困難の谷に陷いり居たる米軍方へ持ち參り、かろうじて其の全敗の厄運より救ひ出したりと云へり。

寄書

愛孃諸子ニ一考ヲ乞フ

在獨逸　竹水女史

當今我國ノ婦人社會ハ辛ク共同ノ陋習ヲ脫シ漸ク社會ニ其地位ヲ高ムルニ汲々タリト承ルハ國家ノタメ誠ニ賀スベキヿナリ

其手段ニ至テ種々樣々ナリト雖モ要スルニ第一女子ノ敎育ヲ盛ニスベシトイフニ在ルガ如シ而シテ之ヲ勸ムル所ノ男子モ勸メラルヽ女子モ皆此一手段ニ依テ西洋文明國中等以上婦人社會ノ如キ幸福及ビ地位ヲ得ベシト信セラルヽガ如シ抑モ文明國婦人ノ地位高フシテ男子ヨリ尊敬セラル所以ハ必ズシモ女子ノ敎育高キガ故ニアラザルナリ我國ノ婦人ト比較スルトキハ如何ニモ優等ニ相違ナケレモ更ニ文明國其國ニ附テ子細ニ見察スル時ハ女子ト男子ノ敎育ノ度ハ正シク我日本女男ト同比例タルヿヲ知ル蓋シ今日文明ノ婦人モ往昔ハ婢妾視セラレテ男子ノ如ク同等ノ敎育ヲ受ケザリシガ故ノミ男子ノ敎育ハ女子ヨリ從事スル數世期ノ前ニアリ今遽カニ女子敎育學問ヲ盛大ニナサント試ムルモ之ヲ以テ容易ニ男子ノ學問ト等一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ナルハ得テ望ムベカラザルナリ諺ニ曰クローマハ一日ニ成ルニアラズト男子ノ構成セル學問モ又是ニ外ナラズ。

女子ハ男子ナラザル以上ハ妄リニ男子ノ長スル所ニ依テ競走ヲ試ムルハ恰モ猴ノ水中ニ魚ト游泳ヲ爭フニ異ナラズ是ニ依テ女子ノ地位高マルベカラズ男子ノ尊敬ヲ受クルニ足ラズ女子ハ宜シク女子ノ長ズル點ニ於テ勉ムルニ如カズトハ女學雜誌上しばしば解カルヽ所ナレバ贅ハズ然ルニ妾ノ尤モ不可思議トスルハ我國女子ノ地位ヲ高尚ナラシムルノ手段トシテ悉ク西洋文明國ノ風ヲ其儘舞踏會ニ至ル迄採用セルニモ係ハラズ女子財產分與ト法律上相當ノ保護ニ就テ計畫スル者アルヲ聞カザルニアリ。

抑モ文明國婦人ノ地位アル專ラ此點ニアリ今日及ブベカラザル學問ト婦人特有ノ慈善及家政取締法ノ如キ無形物ノミヲ以テ男女同權或ハ男子ノ尊敬ヲ受ケント欲スルハ無謀ト言ハザルベカラズ現世ハ聖人君士ノ社會ニアラズ俗界ニハ俗界ニ處スルノ手段ニ依ラザルベカラズ其一手段トシテハ女子財產ヲ有セザルベカラズ男子ノ結婚ヲ求ムルニ當テ女子ノ財ヲ問ハザルハ古來ノ積習未ダ脫セズシテ金錢ヲ賤視スルガ故ノミ有爲成業ノ男子ハ常ニ貧ナリ貧ナラザルモ僅ニ足テ殘ッ少ナキヲ知ル他ナシ學事或ハ他ノ事業ニ資財ヲ投ズル多キガ故ナリ業遂ニ成レハ父母ハ之ニ結婚ヲスヽム多クハ不得已トカトナヘテ家柄ヨキ某孃ト偕老ヲ結ブ相談落着ノ早キ怪シム者ナシ況ンヤ新郎君ハ美ナル衣服調度ノ外一物ノアルナシ家君ハ月給ヲ融通シテ世間ノ躰裁ヲ飾リ僅ニ細君ト英語ヲサヽヤキ以テ幸福ナルホームト心得知ラズ此ノ如キハ永續スヘキ幸福ナルカ當初ノ相談速カナルハ他日離婚セラルヽノ緩急左ナル者ニテ此塲合ニ妾等ヲ保護スベキ法律ナキヲ如何セン故ニ女子財產分與ト法律上ノ保護ヲ求ムルハ我國今日ノ急務ナリト思考ス。

次ニ女子ニ自重ノ心得ナカルベカラザルヿモ當誌ニ說カルヽ所ナレ𪜈試ニ其一例ヲ述ヘン則チ時ニ西洋流ト心得新聞ニ男子ノ求婚ノ廣告ヲ見ルヿナキニアラズ其躰裁一ナラズト雖𪜈其女子ニ注文スル所ノ(Conditions)多キニ係ハラズ當人ハ僅ニ月給幾何ヲ叢ス云々甚シキハ寫眞樣ノ者ニ對シ御望ノ貴婦人ハ申込アリタシナゾノ類モアリト聞ケリ此等ハ男女均一ノ理ヲ口ニスルモ其實ヲ知ラザル者ニテ之等ノ求ニ應ズル者ハ自重心ナキ者ニテ昔日ノ日本婦人ト其結果ハ一ナリ往昔戰塲ニ於テ勇將ノ相見ルヤ先ッ各々其姓名ヨリ地位ハ勿論番地否住所マデ名ノルト聞ケリ而シテ已レ先方ノミヲ名ノラシムルアルヲ聞カズ。

新報

(此欄内自由に轉載を許す)

○婦人獻上

男子同等の人類たり、靈魂優美の人間たる婦女子を以て、一箇の物品となし、重箱、お萩、牡丹餅と類を同ふするものと見做すの惡弊、明治の今日に於て尙ほ未だ全く滅せず、而も當今女學校女人講の、設立に汲々たる彼の佛教徒の間だに於て尙ほ未だ滅せず。近日の新聞紙に云く、

佛法の迷信は今猶ほ全く去りやらずと見ね肥後熊本の酬恩社へ去月中信徒等より婦人を獻上したるよしにて而も其婦人と云ふは熊本二本樹東雲樓の娼妓(十八年)なりとぞ獻上當日の模樣は講中の者ども一同麻上下を着し婦人は新調の乘物に打乘せ前後左右を警護して恭しく酬恩社本局へ屆け出でたる其書面に

一女　一人

右酬恩社供養の爲め奉獻上候也

酬恩社用係は謹て婦人を受取り供養として受納致候旨の領收證を與へたるに信徒等は之を押戴き涙と共に念佛して三拜九拜喜び勇んで立歸れりといふ

驚ろくべく、悲しむべく、怒るべく、憫れむべきの極也。佛海の諸智識、請ふ早く其信徒をして此の迷想を發悟せしめよ。

○飴賣の歌

本鄕下谷邊を徘徊する飴賣の歌に付て、前號に社友石橋君が論述せられたるものは、吾人當路の人の夙に注意せられたる所あらんことを希ふ、彼等は近頃又々淺草區内に侵入し、弥よ益々其醜聲を流さんとするよし、吾人は其の一日も早く取締られんことを望む。

○東京美術學校　同校にては去る十日を以て開校すべき豫定なりしが濱尾同校長岡倉同校幹事は古代美術取調べの爲め京坂奈良地方へ出張を命ぜられ其の歸京せしは暑中にて大臣を始め上官の不在中にて萬事手廻り兼ねしが愈々近々規則を發布し生徒を募集すると云ふ而して同校教頭はフエ子ロサ氏が兼務せらるゝ由。

○看護婦人會　小松宮御息所を初め大臣次官の夫人令孃方が設置せられたる同會は赤十字社病院に於て每週一回づゝ開らかれ居りしが赤十字社も追々盛大に赴くに付ては同會も一層會務を擴張して會員を募集せらるゝと云ふ。

○小田原幸女學校　同女學校の事に付き嘗て疑を記したるに貧女の友の辨ぜらるゝ該地よりの手紙に由れば(先頃には單に幸女學校とあれば小學科以上の女學校と推察せられしかも知れず)と有て小學校なる由小學校に四五百名の女生徒あるは珍しからぬことにて吾人が驚きに驚きたるはチト慌て過ぎたることにてありき。

○新潟女學校　同校にて兼て西京同志社女子部の卒業生を傭聘する由なりしが愈よ三輪いし子を聘することに決せしと云ふ。

○福岡尋常師範學校女子部　同校は目下新築中なるが工事も餘程捗どり本月上旬迄に悉皆落成せしむる見込にて十日頃には移轉の運びに至るべしと云ふ。

○前橋英和女學校　にては此度京都同志社女學校の教授たりし米國婦人ミス、シエッド氏を招聘したるが同女史は女兒を教養するに自然の特性と他年の經驗とを以て懇切に教授さるゝと云ふ。

○古川小學校　陸前古川驛なる同校は女生徒の數四百名も有之由なれど從來女教師は皆無の姿なりしを同地の永澤小兵衛其他諸氏の盡力にて此の度宮城尋常師範學校女子部の卒業生二名を雇ひ入れしと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○三重女教員講習會　去月十七日を以て勢州安濃津極樂町戊子倶樂部に於て發會式を執行したる同會の模樣を聞くに川村寬氏は發起人の資格を以て開會の主旨を演べ續て會則を議定し吉田とみ江崎みさの兩子を幹事に當撰せり而して其の會則の重なる條項は每年二回安濃津に會合し授業法及び諸科の講習を爲すに在りと云ふ。

○札幌基督婦人親睦會　去月十一日午後三時より札幌偕樂園內偕樂亭に開れたる同會の概況は大島千代子の司會にて會を開き立花もと子開會の主意を演べ續て藤田ちか田中頴辻秀三子の演說等ありて頗る有益なる親睦會なりしと云ふ。

○福岡縣下の產婆　同縣下にては產婆組合集會に於て業術の進步著しく從來臍帶を切斷するに貝殼又は竹片を用ふるの習慣も一變して剪刀を使用するに至れり而して本期間新に產婆たらんとし業術の試問を受け及第したるにより免狀を得たる者二百四十八名ありしと云ふ。

○岐阜縣の娼妓公許　岐阜縣下にては從來娼妓を公許せざりしに近來貸坐敷開業娼妓公許願を出せしものありて紛議の起りし趣及余輩の望む所を誓つて本誌上に揭載せしが右は其筋にても餘程秘密に取扱ひ許可の有無も知れざりしに去月十六日營業年限を向ふ十五ケ年として公然許可したるに付願人なる同縣上加納村の坂井田和吉は兼ての契約に從ひ岐阜市區改正費へ出金すべき二萬二千圓も同日受渡しを爲したりと云ふ。

○娼妓貸座敷取締規則　右縣にては去月廿四日を以て左の如く布達せられたり

岐阜縣令第七十二號娼妓貸座敷取締規則左の通り定む

明治廿一年八月廿四日　岐阜縣知事小崎利準

娼妓貸座敷規則畧す

○遊廓　田舍新聞の報ずるところを聞くに豐前中津にては兼て出願中なりし遊廓設置の件は愈々許可さるゝとの噂ありと重ね〴〵斯る忌はしき報道を聞くは吾人の慨歎に堪へざるところなり。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○佛國女子大會　明年は佛蘭西革命の百年紀なりとてパリスに於て女子の大會を開くべき目論見あり同國の婦人黨（ウヰメンス、レギュー）及び女子協會（フ井メール、フエデレーション）之を發起しパルベロース夫人會長となり兼て婦女子の事に盡力せらるゝ有名のアルリックス氏之を助け凡そ三週間引續ひて集會を催し其內八日は世界各國より招待したる婦人方に馳走する趣而して集會の間は一切政談を禁じ專ら其他か實用のことを會話するよし去る七月二十二日の相談會には世界各國より二萬五千人の婦人を招待し此の婦人は各く其夏人を同伴せらるゝ事を乞ふの趣に決したる由但集會中男子は決して其會談中に發言すまじき定めと承はる。

○佛國武官婚姻法律　佛國從來の同法律によれば凡そ武官は其婚姻前先づ將官の許しを經且つ其婦人が少くとも四千弗の持參金を所持する趣きを證するに非ずは結婚を許されざりし處此の度陸軍大臣は此法律を全廢せんことを內閣に申出したりと云ふ。

○英國女王及び離緣されたる婦人　從來英國朝廷の習慣として凡そ離緣したる若くは離緣されたる婦人は其の情實の何如に憐れむべきものあるに拘はらず決して女王陛下謁見の爲にセントゼームス宮に入るあたはざることなるが近頃ろ陛下は斷る婦人を密かにウインゾル宮にて接見遊ばされ其由宮廷錄事に出で最早世人の汎ねく知る所ろとなりしが極近の御接見日に亦同樣の事件にて一つの困難が起りたりと申すは或る婦人其節參內せんとしたるをチャムバーレン氏は之れ離緣されたる女ゆ相違なしと云ひ友人共の多くは否らずと申し甚だ八釜しき議論となりしかば然らば其証跡を委しく取調べて陛下の御前にて讀上げさせ然るのちにて兎も角もすべしとのチャムバーレンの嚴命ありしよし何如なりしや未だ後報なければ興論全躰の感じは凡そあはれなる事情に由て離緣の不幸に會ひたる婦人は既に彼の先例もある儀ゆへ成べく謁見を許さるゝようにいたされたしと申すに傾きたり。

○ラムセー孃　英國カムブリッヂ大學に於て去年の試驗に拔群の成績あり女王陛下より寫眞を賜はり一時全英の大評判と爲り當時わが女學雜誌上にも記したる彼のラムセー娘は今度いよ〳〵トリニチーカーレーヂの校長博士バットレル氏と婚姻さることに定りたり。

○新聞屋學校　米國ワシントン府內に於てレッゲット夫人（Mrs Leggett）は新聞屋學校なるものを設立し女子にして記者たらんとするものを養成するよし。

○米國婦人の壯健　米洲合衆國の東部に於ては女子は男子よりも丈夫なりと云へり既に此頃のニウヨークメール新聞にも此事を記るして云く現今當地の交際社會に於ては婦人の身躰壯健なるとは婚姻の市場に於て一つの大切なる箇條と相成れるゆへか婦人の丈夫となられたると驚ろく計りなり人もしブロードエー（大通り）の第十四丁より第二十二丁の間だを暫らくにても往來し往來の男女の顏色樣躰を見れば直ちに此の言の眞なるを知るべし。

○クレブランド夫人の右の手　米國大統領クレブランド夫人の右の手は前方未婚の時よりも大相に大きくなり前に用ひたる手袋がハイラヌようになりしと申す何故左の手は左はなくて右の手計りが左樣かと云ふに之れは大統領の夫人となりてより客に接すると非常に多く每度右の手にてセークハンド（握手）するよりの事と註釋せらる大統領クレブランド氏も亦た同じく大きくなりしならんが之は男性の事にて元とユルヤカなる手袋を用ひしゆへ今日其手が這入らぬほどにも感ぜられざるよし評判す名望高き夫人は其の右の手の大小肥瘠迄が新聞の種となる也。

小供談

本號も亦た余白乏しく困り入候まゝ不得止此の議を除く然し次號には是非載せますれば切に御容赦あらんことを願ひ升。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

美妙齋主人新作

夢

右の長詩來る二十二日發兌の本誌第百二十八號に附錄として掲載仕候に付き豫め讀者諸君へ御風聽申上候也

女學雜誌社

●女生徒募集廣告

本校各學則生徒入學ヲ許ス教授ハ熟練ナル内外教師之レヲ擔當ス且便利ナル寄宿舍ヲ設ク寄宿ヲ望ム御方ハ宿所姓名ヲ記シ郵券二錢ヲ送附アラバ規則書ヲ呈スベシ

明治二十一年九月

麻布區本村町二百十七番地

私立 普連土女學校

●貴女之友

第三十四號 九月五日發行

探幽筆唐子遊の石版密書(略傳附)●愛きことのきはみ○婦人會の事業○大和錦(繪入)○「さて」といふ言葉○女學記者の答辨○歌○曇天の日が晴天の日より蒸熱きこと○雨と樹木○歌○料理問答○醫者の來るまで○人力車の害○歌○小兒の希望○惡に勝つに善を以てせよ○書探し○土佐日記講義○讀者の物○學窓閒話の解答●新報○愛知女學校○名古屋清流女學校○秋用婦人英語會○加藤錦子孃○クレヴランド氏の夫人○女史の實業教育○新刊書○一山自文の批評●廣告○數件●每月の日發行○一部金八錢○十二部前金九十錢○郵稅一錢宛

東京日本橋區本町二丁目三番地

東京教育社

交詢案内

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十 教師 府下某女學校にて東京師範學校女子部卒業生を雇ひたき處あり授業時間三時間位にて校内に止宿してもよろしとのこと

●雇はれたき方（乙）

六 奉公 地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇ハれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齡廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇ハれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのよ其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十二 教師 或師範學校にて普通學三年餘修業せしもの學校に七八圓位にて通勤致したく又は他の御内にて入込み教授するならば六圓位にて雇はれたし可成は東京横濱の中を望む

十三 教師 栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にも教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

十四 洋行 身元慥なる十八歳位のものにて英漢學も可なり出來るものにて學問研究の爲め貴婦人の歐米に航せらるゝ御方の小間使ひとなりて同行を願ひたし

一八 召使 年齡十四五才のもので學資に乏しく依て小間使となり餘暇に修學いたさせくれる人あれば無給にて雇れたし雇主可成的基督信者を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし

二〇 裁縫 年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之内ゟ小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二二 教師 年齡二十七年東京府女子師範學校卒業生にして或る貴家令孃の出教授を望む者あり

出張教授を望む

壯年にして身元確實品行方正生來高等の教育を受け最も獨逸學に通曉する者あり今般當人の餘暇を以て毎日官員華族若くは其他の令息令孃等の御内に獨逸語出張教授仕度候間御望の御方は何卒女學雜誌社まで御通知被下度候尤も時間は午後の内一時間乃至二時間にて報給は八圓乃至十二圓とす又二人以上御組合にて一同に教授仕りても宜敷候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

眞理一斑

再版

植村正久君著

本書の是非は識者の定論も有之今更流俗の顰に倣ふて區々の賛辭を須ひず

●全一册三百三十六頁上製定價三十五錢郵税十八錢也●並製價三十錢郵税十六錢也●郵便切手一割増の事●爲換は總て新橋郵便局たるべし

東京日吉町二十番地

警醒社

開輪正路君纂著○木村熊二、田口卯吉兩君序

女子必携 **今世ひめ鑑** 全一册 定價六十錢 郵税十四錢

右出版いたし候是非は自から公評わらん凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵悉とく記載し有之候蓋し昔の「ひめ鑑」の重寶なりしとを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑も亦同樣に助けわるとを想像し玉ふべし

婦人矯風會書記佐々城豐女譯

婦人言論の自由

一册十錢 郵税四錢 （新版）

德富猪一郎君評曰く婦人の言論ハ人を屈服するに非ずして人を勸誘するに在り而して其勸誘するや或ハ涙となり或は笑と爲る然れ共其一泣一笑時に或は千言萬語滔々たる議論に優れると無きにわらず吾人は佐々城姉が此譯の世に出でたるを喜び世の姉妹に此書を一讀せられんとを推薦す云々

巖本善治君評曰く然れども余が此書に於て特に尤も歎賞し措く能ハざる者は本書の著作の由來記にわる也記に云く明の夜妾眞人と共に出で、逍遙す偶ま會堂に入て共に座に就く時牧師會后の集會に云々此時妾眞人の面を親ふに眞人勃然として立ち反論して之を不可とす妾實に晴天霹靂の思ひわりき然れ共直ちに携ふる所の速記用紙筆を取出して則ち眞人の論を筆す記して成る所のもの即ち此書なり云々。

諸姉妹乞ふ一讀を賜へ。

東京日吉町八番地

女學雜誌社

發兌					
九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價			
一册。五錢	郵税。一錢	（但府內無郵税）	
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）	
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲ぐる毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行	一回	前金拾錢	（廿七字詰）
同	三回以上	一割引	
同	六回以上	二割引	

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し廣告は不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は本社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町淑々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新乾町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷町四丁目文壽堂○横濱住吉町角田早眞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出堂○京都四條通小橋西へ入淺集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大阪備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年九月十三日印刷
明治二十一年九月十五日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐